様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：３４１０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００７２４

研究課題名（和文）日本語教師の「熟練性」のライフヒストリー的研究―目標の多層化と省察機能の発達―

研究課題名（英文）Reflection on "skillfulness" of Japanese language teachers through life history approach-How they develop multilayered goals and the function of reflection

研究代表者
康　鳳麗（KANG, FENG LI）

鈴鹿医療科学大学・保健衛生学部・准教授

研究者番号：３０３９９０３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：２つの研究成果がある。１つ目は、熟練教師の目標構造の多層性を明らかにしたことである。事例として二人の熟練教師の授業実践を取り上げ、共通項として「三層構造の目標」を抽出することができた。また目標構造の多層化を促す契機として、教師の学習者への期待内容に変化があることを明らかにすることができた。２つ目は、中国人中堅日本語教師の事例研究である。熟練教師と比べて、目標構造についてはまだ形成途上であり、不安定ながらも、留学や研究を通して、学習者の主体的な活動を重視する自分の授業スタイルを形成している。学習者が獲得すべき知識・技能の習得を促し、自律性を育てるための日本語教師の挑戦を今後も追っていきたい。

研究成果の学術的意義や社会的意義
１つ目は、学習者の主体性の尊重という理想は、現実的には、資格や試験において要求される知識・技能との両立の中で実現されるということである。それは日本語教師個々の授業改革への挑戦として表れている。ライフヒストリーインタビューの中で明らかにした個々の挑戦の来歴は、これから日本語教師となる者への参考となる。
２つ目は、上の両立が、熟練教師の目標の多層化として表れることである。知識・技能の獲得という目標は捨て去られるわけではなく、維持される。むしろ暗黙の目標として日本語教育観や人間教育観が形成されていくことを明らかにした。上と同様、これから日本語教育者になる者へ参考となる。

研究成果の概要（英文）：Two research findings can be summarized: First, we were able to identify the multi-layered nature of skilled teachers' goal structures. We took up the classroom practices of two experienced teachers as examples, and were able to extract "three-layered goals" as a common denominator. We were also able to identify changes in teachers' expectations of learners as an impetus for the multilayered nature of the goal structure. The second was a case study of a mid-career Chinese teacher of Japanese. Compared to experienced teachers, she is still in the process of forming her goal structure, and although unstable, she has formed her own teaching style, which emphasizes learners' independent activities, through her study abroad and research. We would like to further follow the Japanese language teacher's challenges to the knowledge and skills to be acquired and to autonomous learners.

研究分野：外国語教育

キーワード：日本語教師　熟練性　ライフヒストリー的アプローチ　ライフヒストリーインタビュー　目標の多層化　目標の省察機能　ストップモーション方式

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

教師の「成長」「熟達化」「熟練性」の研究は、教師の力量内容や力量形成、さらには、教師養成のシステムやカリキュラムを考える者にとって、きわめて重要な課題である。1980 年代までは、当時の技術主義的な強い影響のもとで、「熟達化」研究も技術に焦点化されていた（北尾・速水, 1985）。しかし、1990 年代に入り、教師の「熟達化」の研究は大きな転機を迎える。背景となったのは教師の専門家像の技術的熟達者から反省的実践家像への転換である（Schön,D1983）。

日本で研究の先がけとなったのは、佐藤学（1991）から始まる一連の熟練教師の思考様式の実証的な研究である。佐藤たちは、熟練教師の「熟練性」が実践的知識を用いた実践的思考様式にあるとし、初任期教師と熟練教師の比較研究を行った。その結果、熟練教師と初任期教師の思考様式の違いとして、①即興的思考、②状況的思考、③多元的思考、④文脈的思考　を明らかにした。実践的知識、実践的思考様式とは、教師が授業で生成し、使用している知識であり、身体知、暗黙知に及ぶ。その知識は、必ずしも専門的、理論的な知識ではなく、状況的文脈的で個人経験的な知識である（Elbaz 1981,1983）とされる。

日本語教育の分野においても、2000 年代以降、教師の熟達化研究において、実践的知識と実践的思考様式に研究の焦点が移ってきている。例えば、初任期教師と熟練教師の思考の比較研究（野口 2005）(坪根他 2005）（小澤他 2005）である。研究方法として野口はオンラインモニタリング法をとり、坪根は授業観察後のレポートを分析の対象としている。

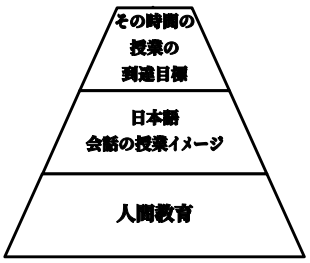
これらの熟練教師の「熟練性」の研究は、従来の技術主義的な知見にはなかった教師の専門性、熟練教師の「熟練性」の内実を明らかにしてきた。しかしながら、課題も存在する。

大きな課題としては、熟練教師の実践的知識、実践的思考様式に焦点が当てられている一方、形式知である技術知との関係についての論究がほぼ皆無であることである。先行研究では、技術知と実践的知識が二項対立的に捉えられ、「熟練性」は実践的知識とあたかも不即不離のように位置づけられている。私たちのこれまでの研究において明らかになったことは、授業技術も実践的知識の獲得によって変化を受け、より柔軟にシンプルに、あるいは高度化していくことである（康他 2007,2008,2010）。授業づくりの基礎・基本である技術知は、経験を経る中で、ルーティン化、身体化されていくだけではなく、実践的思考様式の中でその顕現する媒体になっている。私たちの研究の核となる問いは、熟練教師の「熟練性」を実践的知識と技術知の構造との関係においてどのように説明するか、である。日本語教師の「熟練性」を暗黙知・身体知である実践的知識によってのみ説明することに終始していては、とくに初任期教師の成長は経験の壁によって阻まれてしまう。「熟練性」の形式知、技術知との関連性が明らかになれば、初任期教師でもある程度獲得できる道をひらくことができる。

２．研究の目的

私たちは、熟練日本語教師のパイロット研究（康他 2015）において、熟練教師が持つ目標概念に着目するに至った。インタビューの中で熟練日本語教師の多くが、「語学は人間教育」と語っていた。当時はそれを理想や哲学を語っている言説だとみなしていたが、この目標は今ここで行われている授業においても機能していることが明らかになってきた。初任教師の授業では目標構造は右図一番上層のシンプルな目標であるのに対し、熟練教師の目標は少なくとも 3 層構造であることが明らかになった。この研究仮説をもとに、熟練教師の目標の多層化が授業にどのように機能しているのか、とくに授業の省察機能にどのように影響しているのか、またその多層化の発達はどのような契機とプロセスで起こるのかを明らかにするのが本研究の目的である。

図　三層構造の目標



３．研究の方法

まずは教師の「目標の多層化」に注目しながら日本語教師の熟練教師と初任期教師との授業の比較研究を行う。授業観察・分析およびその授業の特質についてライフヒストリーインタビューを行う。研究対象は初任期の教師（１～５年目）、および熟練教師（15 年以上の経験）とする。両者の比較研究を行うことにより、「目標の多層性」の内容や質、その機能（とくに省察機能）や意味を明らかにすることができる。

具体的には、本研究は授業における臨床的場面に焦点化される。教材や活動の構成と実際の使用場面における対応場面、発問や指示に対する学習者の応答場面、そして学習者の授業の振り返り場面における応答の 3 つの場面に絞って、両者の応答を比較対照し、その特徴を抽出する。すでに筆者らがライフヒストリーインタビューを行ってきた熟練教師（30 名）を核にして対象者を 50 名程度に広げたい。また初任期の教師も同数程度事例研究を行う。それらは個別教師のモノグラフとして記述されることになる(１～２年目)。

研究期間後半(２～３年目)においては、さらにモノグラフを積み重ねながら、個別事例研究を超えて、目標の多層化と省察機能の発達を核に教師の力量形成のイメージを描き出し、実践経験においていったいどのような質の経験が必要か、そのためにはどのような条件や省察が必要なのか明らかにする。そしてそれをもとに日本語教師の資質能力の育成プログラムを開発する。その成果は、日本語教育学会等において報告し、学会あるいは大学の研究紀要に発表する。

４．研究成果

年次報告）

1 年目、2018 年度は主に、日本語熟練教師の熟練性を個別事例研究として「目標構造の多層化」の観点から分析することに集中した。台湾における日本人日本語教師の協 力を得ながら、大学における授業の分析、さらに授業の特徴点について授業者との対話、また授業の特徴の形成過程についてのライフヒストリーインタビューを 行った。 その結果明らかになったことは、授業者が単に日本語の学習を進めるということだけではなく、台湾の学生

の実情に即しながら、日本語を使う場面を想定し、 その中で必要なコミュニケーション能力をつける、という目標も同時に達成しようとしていたことである。また、台湾人の青年としての成長も願っている。 その「目標構造の多層化」は、台湾の大学の日本語教師として経験を重ねる中で獲得してきたものであることも明らかになった。こうした熟練教師の資質・能 力の獲得は、教師の力量形成として、校種や教育環境の違い、学習者の違い（発達年齢）を超えて共通するものがあることを、事例としては極端に違う事例（公 立小学校教師）をとりあげることによって明らかにした。両者とも、授業の目標構造は単層の構造ではなく、少なくとも三層構造（授業の目標、教科や教育内容 の目標、人間形成としての目標）を認めることができた。そして目標の多層化の契機は、教師経験の中での経験に由来することもライフヒストリーインタビュー の中で明らかにされた。 なおこの研究の成果は、康鳳麗、森脇健夫が中部教育学会で報告し、鈴鹿医療科学大学の大学紀要論文(康、森脇、坂本、小西、工藤(台湾)ほか連名執筆)とし て上程された。

2 年目、2019 年度は、前年度の台湾人中堅日本語教師の力量形成研究に引き続き、今年度は、天津外国語大学の二人の中国人日本語教師の授業参観及びライフヒストリー インタビューを行った（2019 年 12 月）。二人の中国人日本語教師（D さん、H さん）については、十年以上にわたって新任期から継続的に参加、観察を行ってき た。新任期から中堅期にかけて、両氏とも日本において博士号を取得し、学内でも重要な任務を任されるようになった。教師としての経験も積み、それぞれに授 業スタイルを構築してきている。初任期から中堅期にかけてのそれぞれの授業スタイルの確立について、事例研究としてまとめる準備をしている状況である。 さらに 2020 年 3 月に、成都理工大学において K さん（中堅教師）の事例研究をする予定であったが、新型コロナウイルスの影響で実施することができなかった。 なお、今年度の実績としては、中部教育学会（2019 年 7 月 6 日 朝日大学）の自由研究において前年度に授業の参加観察およびインタビューを行った Z さん（台 湾）の個別事例研究を報告した。Z さんの事例研究も 3 年間にわたる授業の参加観察およびインタビュー記録の整理、及び考察が基軸となっている。

3 年目（延長期間）、2020 年度は、コロナ禍の影響でフィールドワーク（成都理工大学）が予定通りに実施できなかったが、先行研究のレビュー、研究データの整理・分析、共同研究者の遠隔研究会を主として行った。その成果として、論文を一本作成した。（康鳳麗，森脇健夫，坂本勝信，小西知代，田泉：初任期から中堅期にかけての日 本語教師の授業スタイルの形成－2 名の中国人日本語教師の 14 年間の足跡を追って，鈴鹿医療科学大学紀要第 27 号，2021 年 3 月，23-31） 本論文では、2005 年から 14 年間にわたって二人の中国人日本語教師の授業の変化と観の変容、またその関係を追った研究である。15 年間にわたるテーマの探求 は、本研究ならではの研究視角であり、日本語指導の基礎・基本を確立する初任期から、自らの授業スタイルを構築していく中堅期にかけて、二人の教師が何を きっかけにどんな観を作り上げていったかを明らかにすることができた。この研究は、本科研費研究の核となる研究であり、今後の研究の仮説モデルの形成の基 盤となる研究である。

最終年度、2021 本年度もコロナ禍の中、予定していた国外における事例研究については、実施することができなかった。しかしながら、中国成都で行われた研究授業をビデオ 撮影し、その映像をもとに授業者を交えての授業検討、さらには、授業の構成要素の学習形態や

内容についての出自をライフヒストリーインタビューをもとに明 らかにすることができた。その研究成果については以下の論文にまとめている。 「ストップモーション＆ライフヒストリーインタビューによる授業研究ー中国人日本語教師の授業形成史研究ー」（『三重大学教育学部研究紀要』第 73 巻, 537-551, 2022 年 3 月発行）授業日：2020/12/18 共同研究者による事前検討：2021/8/14 実施日：2021/9/12 さらに、今後の研究の展望につながるものだが、熟練教師の観の変容として、学習者の主体性、能動性を育てることの重要性の認識と具体化が挙げられるが、 その一つのアプローチとして、めあて・ふりかえりの洗練化があることを明らかにし、実証実験的に、私たちの授業改善を行ってみた。その成果は、中国語教育 学会の報告、また天津師範大学で行われた（オンライン開催）世界漢語教育学会大会にて報告することができた。以下にそのタイトルを挙げておく。 「学習者オートノミーを育てる「ふりかえり」の実践的研究」中国語教育学会, 2021.6.6 オンライン 「中文教学在日本医科高等院校的探索与実践ー以鈴鹿医療科学大学為例ー」世界漢語今日医学学会第十四回国際中文教育検討会, 2021.18.19 オンライン

全体の概要）

2020 年以降、コロナ禍の影響で、日本語教育の現場（国内外）への訪問及びインタビューができなくなってしまうというアクシデントはあったが、オンライン研究会、ビデオファイル視聴等の補完的なツールを使っていくつかの重要な研究成果をあげることができた。主には二つの成果として整理することができる。

１つ目は、熟練教師の目標構造の多層性を明らかにし、それがどのように形成されてきたかをライフヒストリーによる明らかにしたことである。きわめて対照的な二人の熟練教師の授業実践を取り上げ、共通項として「三層構造の目標」を抽出することができた。また目標構造の多層化を促す契機として、学習者への期待内容の変化があることを明らかにすることができた。

２つ目は、中国人中堅日本語教師の「観」の変容と授業スタイルの形成の過程を明らかにできたことである。熟練教師と比べて、目標構造については、まだ形成途上であり、不安定ながらも、留学や研究を通して、学習者の主体的な活動を重視する自分の授業スタイルを形成してきている。それについては二本の事例研究論文を成果として挙げることができる。

学習者として必要な知識・技能を保証しながら、どのように学習者の主体性を発揮させるか、その二つの軸の中で自分の授業スタイルをどうつくりあげるか、それが目標構造の多層化と同関連するか、さらに探究していきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計21件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　3件／うちオープンアクセス　21件）

１．著者名 森脇健夫，康鳳麗，坂本勝信，小西知代，胡君平	４．巻 第73巻
２．論文標題 ストップモーション＆ライフヒストリーインタビューによる授業研究ー中国人日本語教師の授業形成史研究ー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 三重大学教育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 537-551
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 森脇健夫	４．巻 第4号
２．論文標題 実践知と技術知の架橋をめざして	５．発行年 2022年
３．雑誌名 三重大学教職大学院論集	６．最初と最後の頁 107-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 坂本勝信，谷誠司，山下浩一，内山夕輝，染葉麻愛美	４．巻 38
２．論文標題 浜松国際交流協会との連携による地域日本語教育の試みー令和２年度常葉大学地域交流連携推進事業ー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 常葉大学外国語学部紀要	６．最初と最後の頁 69-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 坂本勝信，山下浩一，谷誠司，康 鳳麗，小西 知代，森脇 健夫	４．巻 38
２．論文標題 依頼メールの適切さに「構成」が関わるかー日本人大学生への調査を通してー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 常葉大学外国語学部紀要	６．最初と最後の頁 29-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 康鳳麗，森脇健夫，坂本勝信，小西知代，田泉	４．巻 27
２．論文標題 初任期から中堅期にかけての日本語教師の授業スタイルの形成－2名の中国人日本語教師の14年間の足跡を追って	５．発行年 2021年
３．雑誌名 鈴鹿医療科学大学紀要	６．最初と最後の頁 23-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 森脇健夫	４．巻 72
２．論文標題 授業におけるふりかえりの実践的研究	５．発行年 2021年
３．雑誌名 三重大学教育学部紀要	６．最初と最後の頁 383-397
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 森脇健夫	４．巻 495
２．論文標題 「新しい日常生活」で育つ非認知能力（“grit”「やり抜く力」）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 奈良女子大学附属小学校、学習研究	６．最初と最後の頁 16-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 森脇健夫	４．巻 3
２．論文標題 地域の教育課題解決演習の4年間	５．発行年 2021年
３．雑誌名 三重大学紀要職大学院論集第3号、2021年2月、pp.93-104	６．最初と最後の頁 93-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 谷誠司，坂本勝信，山下浩一	4．巻 2
2．論文標題 依頼メール用ルーブリック開発の試み	5．発行年 2021年
3．雑誌名 常葉大学国際言語文化研究科紀要	6．最初と最後の頁 81-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 谷誠司，坂本勝信，山下浩一	4．巻 37
2．論文標題 「YNU書き言葉コーパス」における日本人大学生から教師への依頼メールの構成分析	5．発行年 2021年
3．雑誌名 常葉大学外国語学部紀要	6．最初と最後の頁 51-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 坂本勝信，谷誠司，山下浩一，内山夕輝，河口美緒	4．巻 37
2．論文標題 地域日本語教育における学習者と大学生のオンライン会話練習の試みー令和2年度常葉大学地域交流・連携推進事業ー	5．発行年 2021年
3．雑誌名 常葉大学外国語学部紀要	6．最初と最後の頁 131-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 坂本勝信，山下浩一，谷誠司	4．巻 37
2．論文標題 依頼メールの社会言語能力と「構成」との関わりを探るー日本人事務職員への調査を通してー	5．発行年 2021年
3．雑誌名 常葉大学外国語学部紀要	6．最初と最後の頁 35-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 森脇健夫	4．巻 第71巻
2．論文標題 森脇　健夫。教員養成型PBL教育のカリキュラム開発研究―リフレクションツールとしてのコンセプトマップを用いてー	5．発行年 2020年
3．雑誌名 三重大学教育学部研究紀要	6．最初と最後の頁 339-346
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 角谷道生、森脇健夫	4．巻 第71巻
2．論文標題 高校教科福祉におけるピア・レビューを用いた動画を含む「授業」づくりの効果と検証	5．発行年 2020年
3．雑誌名 三重大学教育学部研究紀要	6．最初と最後の頁 523-531
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 森脇健夫	4．巻 なし
2．論文標題 めあて・ふりかえりの質の向上から主体的・対話的で深い学びへ	5．発行年 2020年
3．雑誌名 伊勢市教育委員会　、令和元年度　事業報告書	6．最初と最後の頁 42-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 坂本勝信、山下浩一、谷誠司、内山夕輝、鈴木由美恵	4．巻 第36号
2．論文標題 平成30年度常葉大学地域交流・連携推進事業ー「多文化共生に資する日本人住民と外国人住民の交流事業」の報告ー	5．発行年 2020年
3．雑誌名 常葉大学外国語学部紀要	6．最初と最後の頁 133 - 156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 谷誠司、坂本勝信	4．巻 第36号
2．論文標題 日本語教員養成課程における教案作成指導・教材開発の授業でのICT利用の試み	5．発行年 2020年
3．雑誌名 常葉大学外国語学部紀要	6．最初と最後の頁 115 - 131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 康鳳麗、森脇健夫、大西宏明、坂本勝信、小西知代、水野直美、工藤節子	4．巻 第25号
2．論文標題 熟練教師の目標概念の多層化ー二つの事例研究を通してー	5．発行年 2018年
3．雑誌名 鈴鹿医療科学大学紀要	6．最初と最後の頁 83-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 森脇健夫	4．巻 第70巻
2．論文標題 教師の「観」の発達と教育実践の変容ー4名の教師の授業参観及びライフヒストリーインタビューよりー	5．発行年 2019年
3．雑誌名 三重大学教育学部研究紀要(教育実践)	6．最初と最後の頁 431-438
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山田雅敏、里大輔、坂本勝信、砂子岳彦、竹内勇剛	4．巻 vol.21, no.1
2．論文標題 ラグビー高校日本代表チームで使用された疾走に関する集団語の成立過程の考察	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ヒューマンインタフェース学会論文誌	6．最初と最後の頁 97-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山田雅敏、里大輔、坂本勝信、松村剛志、大畑昌己、砂子岳彦、竹内勇剛	４．巻 vol.13, no.1
２．論文標題 コーチと学習者との情報コミュニケーションにおける身体スキルの伝達を表現した数理モデルの構築	５．発行年 2019年
３．雑誌名 常葉大学健康プロデュース学部雑誌	６．最初と最後の頁 89-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 康鳳麗，森脇健夫
２．発表標題 中文教学在日本医科高等院校的探索及実践ー以鈴鹿医療科学大学為例ー
３．学会等名 世界漢語教学学会第十四回国際中文教学検討会（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 康鳳麗，森脇健夫
２．発表標題 学習者オートノミーを育てる「ふりかえり」の実践的研究
３．学会等名 中国語教育学会第19回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 松井孝浩，坂本勝信，谷誠司，望月里緒菜，吉川太陽，古橋広樹
２．発表標題 大学と連携した地域日本語教育に携わる人材養成のあり方
３．学会等名 浜松市主催Webセミナー（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 康鳳麗、森脇健夫、坂本勝信
２．発表標題 台湾の大学におけるある日本語教師の授業改革の試み　―3年間のZさんの授業参観及びインタビューより―
３．学会等名 2019年度中部教育学会第68回大会　2019年7月6日（朝日大学）
４．発表年 2019年

１．発表者名 坂本勝信
２．発表標題 １．（パネリスト）坂本 勝信，嶋田和子，石川雅洋，金城アイコ，丹野清人、望ましい地域日本語教育の在り方～量的・質的充足と官民連携～
３．学会等名 日本教育シンポジウム浜松市における地域日本語教育の体制づくり　2020年2月9日開催（クリエート浜松）
４．発表年 2020年

１．発表者名 坂本勝信
２．発表標題 学習者の頭の中をカガクする 「第二言語習得」深掘りから授業改善へ
３．学会等名 日本語教師力１UPセミナー Ⅴ　2019年12月1日開催（MY CAFE錦通店）
４．発表年 2019年

１．発表者名 森脇健夫、康鳳麗、大西宏明
２．発表標題 教師の「熟練性」の研究ー目標構造の多層化の観点からー
３．学会等名 中部教育学会第67回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 坂本勝信、山下浩一、谷誠司、森脇健夫、小西知代、康鳳麗
２．発表標題 依頼メールの適切さに「構成」が関わるか
３．学会等名 2018年度日本語教育学会秋季大会,ポスター発表
４．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

１．著者名 山田康彦、森脇健夫、他9名	４．発行年 2022年
２．出版社 三恵社	５．総ページ数 153
３．書名 対話的事例シナリオを核とした教員養成カリキュラムの創造と評価方法の開発研究（令和元年度-令和3年度科学研究費助成事業研究成果報告書）	

１．著者名 山田康彦、森脇健夫、他7名	４．発行年 2018年
２．出版社 三恵社	５．総ページ数 206
３．書名 PBL事例シナリオ教育で教師を育てるー教育的事象の深い理解をめざした対話的教育方法ー	

１．著者名 グループ・ディダクティカ編	４．発行年 2019年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 271
３．書名 深い学びを紡ぎだす	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	森脇　健夫 (Moriwaki Takeo) (20174469)	三重大学・教育学部・教授 (14101)	
研究分担者	坂本　勝信 (Sakamoto Masanobu) (40387501)	常葉大学・経営学部・教授 (33801)	
研究分担者	小西　知代 (Konishi Chiyo) (60813920)	国際教養大学・国際教養学部・講師 (21402)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関